

ある日

福田 かよ子

えらいことになった。

閉所恐怖症の私がMRIを撮ることに
なった。早速パソコンを開けてインター
ネットで検索してみると

”閉所恐怖症の四十代の男です。昨日、
MRI室でパニックになり緊急停止のボ
タンを押した：”と、出ているではないか。

脳梗塞を発症して十八年が経った。こ
とあるごとにMRIの話があったが、あ
るトラウマから、いつも

「何も変わりはありません」

と、自分から逃げていたのだった。

今年誕生日を機会に健康診断をした。

ヨチヨチと病室に入る私を見た先生は
「いちど、MRIを撮っておきましょうか」
そう言っ窓の外に目をやった。何か

”コワイ”ことを暗示されているような
気がした。側にいた看護師が何気なく微
笑んだのも嫌な感じがした。ひと月後の

予約を了承して帰宅したのだった。

テレビで俳優さんの名前が出てこない
ことが気になってきた。歩く時に足が上

がっついていない事も気になる。だからと言って…

いつも頭に湿ったスカーフを巻いてい
るようだ。運動、運動。振り払うように
毎日卓球に興じていた。

その日が近づいてくるとやはり不安に
なつて寝付けなくなつた。ホームドクター
に相談すると、眠れるようにとデパス0.5

を投薬して下さつた。

「楽しい事はかりを想つて受診してね」

と言われた。

「はああ、楽しい事を、ですね？」

当日が来た。験を担いで好きで気持ち
の落ち着く、紺色のスカートをはいて出
かけた。

これって何だろう…。いつも大きな病
院へ行く時は異様な感じがする。三十七
兆個の細胞がざわめくのだ。

病院の長い廊下をレントゲン病棟に向

かった。早くも緊張が高まつてきた。脳
梗塞の私特有の症状である左半身がこわ
ばつた。通路の途中に狭い窓があつた。
立ち止まって外を見ると、秋晴れの青い
空が広がつた。

”いた。いた。そんな子”

右手、右足を同時に動かして歩行する
子がいたことを思い出して気分を和らげ
た。私だつて、よく走るように足首に輪
ゴムをはめたり、ふくらはぎにユキノシ
タの汁を塗つて真っ青にしていたのだった。

廊下を行く人が忙しそうに何人も追い
抜いて行つた。

MRI室の正面で立ち止まつた。重そ
うな扉には金庫のような大きな取手が付
いていた。赤いガラスの枠の中に磁場発
生中注意と点灯されるようになっていた。

不安を煽られた。扉を開けると押し出さ
れた空気で、久しぶりにはいたジョーゼット
のフレアースカートが扉にまとわり付い
た。部屋の中央に陣取つた5・5トンの

大きな丸い窯のような装置が目飛び込
んできた。近づいて来た緑色のクロック
スのサンダルを履いた白衣の技師が、今

日の何人目かの私の受診票を見た。みん

なに同じように説明したのだろうか、慣れきった抑揚のない声で、

「眼鏡、ネックレス、下着のホック、金属製品は外してください」

と言った。

「あ、金の入れ歯は…、治療してあるので外せませんが…」

気分晴らしに言ってみた。

「はい、はい、はい」

と頷いた。

体の巾だけの細長いベッドに、利き足の方から載るように促した。横たわると頭の部分に丸い窪みがあった。お中元に贈られてくるメロンが固定してある白いスチロールの、丸い窪みのようだった。

「二、二、二、二、二、二」

と言つて、二・三回、顎を突き出しながら目配せをした。私はたじろぎながらベッドの縁に手を掛けて、窪みの中に頭を収めた。技師は頭をベルトで固定した。ヘッドロックされたように完全に死に体となった。それから同じように胸と膝も太い巾のベルトで縛った。

「怖くないですからね…。大きな音がするだけですよ…」

と、言つた。その言葉が怖さを誘つた。オーディオを聴くような、大きなヘッドホンを両耳に掛けさせた。顔面の上に白いスチロール製の野球のマスクプロテクターのような物をひよいと被せた。私はカタツムリのように角を引いて目を閉じた。ヘッドホンから流れる曲は微かにショパンのノクターンの様な気がした。気持ちを落ちつかせようとした。

「それでは行きますね」

と、言つて部屋の明かりを滅灯した。

ウイーン、ウイーン、ゴォー、ゴォー。これが最先端の医療機器かと思うようなジェットエンジンの音がしてきた。細長いベッドの背中に当たる所がグリ、グリ、グリと振動して動き出した。盗み見るように薄く眼を開けると、大きな窯のような所に頭から突っ込んでいた。

もう、逃げ出せないな…。

ベッドの縁に手をかけて踏ん張った。

その時、ふくらはぎがつつた。

「イタイ、イタイ」

「どこがあー？ 我慢できさるうー」

技師は軽く、気だるそうに言つたきりだった。全神経がエンジンの駆動部と一

緒になつて、くるくると同調していった。一部の思考の部分だけは取り残されて私と共にいた。

二週間前にあつた葬儀の光景が思い出された。あの日、ピカピカに磨かれたステンレスの大きな扉がスーッと両横に開いて行つた。黒い喪服に身を包んだ人達が両手を合わせて並んでいた。線香の煙が立ち昇る中を、棺は滑るように罐の中に入つて行つた。

ふわあつと温かい空気が漏れて来て、黒いスカートの裾が波のようにゆつくりと揺れた。

「ガチャン」と、扉が閉まるような金属音がして、ガォーンと高い天井に反響した。」

その時、白衣の技師が側に来た。

「熱い、と感じたらボタンを押して下さいね」

と、言つてスイッチのリモコンを手渡した。

「えッ、熱いのですか」

とうとう来たか、すべてに観念した。張りつめていた気持ちだが、もうどうなっ

でもいいやと思つたら、奈落の底にすうーつと墜ちて行つた。

《白いサテンの布で内貼りされた棺の中に、白い経帷子を着た私は横たわっていた。黒い喪服に身を包んだ人達が取り囲んでいた。白いレースのハンカチを握りしめて、次から次に覗き込んで来た。若い僧侶の鍛えられた喉仏を震わせて唱える枕念仏が聞こえてきた。お輪の音が隔々に流れ渡つた。

〔往生安楽国〕

百合の香りが立ち込めてきた。体の回りは冷たい花びらで埋め尽くされた。芳香が鼻腔をくすぐつた。香り立つた空気はしばらくの間、彷徨っていた。

足元で黒いバックを抱えた女性が立っている。大げさに涙を流している。ユダかも知れない。耳を寄せ合つてポソポソと話をしている。

「意外と早かつたわねえ」

「上手な死化粧じゃないの」

「納棺師に頼んだのかしら。一体、八万円から十二万円が相場らしいわ」

この世に、まだまだ生き続けていく勝

者たちの囁く声が聞こえてきた。私は冷たくなつていった。動揺している幼馴染の友達は、半歩引き下がって涙を堪えられている。

ありがとう。先に行くね…」

いろいろ妄想していたら、涙が溢れ、耳の中に伝い落ちた。

《死後硬直も終わった。殯の三日目。

太っていた皮下脂肪もそれなりに落ちて、骨格が目立ってきた。両手を揉み合わせて、骨を一本ずつ確かめた。働き者で節高かだったが、きれいな母の長い指が思い浮かんで重なつた》

そうだった。母は驟雨の夜、私を呼んだ。長い夜が明けるのを待った。救急車に乗せられて病院に運ばれた。

「母は苦しんでいますか？」

と、先生に問い続けた。

「意識はありません。本人はもう何も分かつてはいません」

と言われた。

母は静かに眠り続けた。私は全てを納

得した。というよりも決断しなければならなかった。首を横に振って、生きてゆく処置を要請しなかった。このことは、私の一生でもなく、非でもないこととなつて悩むことになつていった。

夜来の雨で洗われた秋晴れの曉に、母は全てを私に任せたように息を引き取つた。病院から連れて帰る途中の田んぼは、すでに取入れが済んでいた。切り株から稲穂が蒼蒼と広がっていた。秋芒は弓のように垂れ、朝露に光つて泪と共に膨らんで落ちた。

群青色に聳え立つ藤原岳に、母は本当に死んだのかと、問うてみた。その日から母は確かに、どこにもいなくなつた。四十九日の法要が執り行われた。

經典の『白骨の章』を開いた。

【この世の浮生なる相をつらつら観ずるに、およそ、はかなきものはこの世の始中終り、まぼろしのごとくなる一期なり。我やさき、人やさき、朝には紅顔ありて、夜半には白骨のみぞ残これり】

《御詠歌が聞こえ出した。紫に金の刺繍をあしらつた半袈裟も、腰の折れた老女

たちの丈には長かった。か細く伸びる老女たちの声は幼い頃、箸に絡めて食べた琥珀色の芋飴のように細い筋を引いて伸びた。言うように余韻を持って流れた。

その時、母の声も混じっていた。歌がうまかった、きれいな母の声が聞こえてきた。

立ち並んだロウソクの焰は、阿弥陀如来像の回りをくゆらしていた。線香の煙は私の手を引いた。小さな天窓の明かりの方向に流れて続いた。母が私を連れに来ていた。二十一グラムの魂は北の窓から、天に昇って行つた》

混沌としていた。

ガタ、ガタ、ガタと体中が振動した。コト、コトツ、コトツ、足の先から頭の方まで小刻みに揺られて、ガタンと汽車が連結されて止まったような音がした。

この音は何だろう。

心の中で精いっぱい抗った。生きている証を一つ、一つ探し始めた。しっかりと目を見開いて、奥歯を噛みしめた。顔の上の白いプロテクターマスクの田の字型の隙間が錯視で、ぼんやりと四個に見

えたり、八個に見えたり、扇状に広がつたりした。

手の平が熱くなつてきた。

ああ、手の平から先に焼かれるのか。

慌てて、掌を動かしてグー、パーをしてみた。手が汗でねっちりとしていた。

手が溶けて行くのか。意識して口を何回も動かしてみた。唾を、ごっくん、と飲み込んだら大頬骨筋が動いた。歯を食いしばったら、側頭骨が動いた。ベッドの振動がゴツツ、ゴツツ、ゴツツと背中の中の真ん中に規則正しい間隔で近付いて来た。

手をぎゅつと握りしめ、頭の方から足の先までビーンと伸ばした。そして背伸びをするように突っ張った。ヒューン、ストンとエンジンが止まるような音がした。念力が効いたように思った。青い光が点滅していた。

星の王子様だ。

星の王子様が妄想の世界から呼び戻しに来てくれたのだ。正体は青色ダイオードだった。LEDの光は六十センチくらいの丸いドラムの中を、早い速度で正回転と半回転を繰り返した。先端の医療に救済されるようで安堵した。SF小説の

中にいるようだった。

トントン、肩を叩かれた。技師が側に立っていた。

「ああ、はあ。」

キョトンとした私に、

「はい、終わりましたよ」

技師がプロテクターマスクを軽く持ち上げた。解放された。

恐怖のあまり、さ迷っていたことは内緒にしておこう。愛想笑いをしてスカートのフレアを正面に合わせた。

不安だらけの殻を脱ぎ捨てて、颯爽と重い扉を押し開けた。何ごともなかったように廊下に出ると、点滴を付けた担架が通り過ぎて行つた。旧知の看護師と出会った。

「まあ、お久しぶり。」

すれ違いざま、二三言三言話した。

「病院でお久しぶりっていう話も変だよ」と苦笑した。

脳外科の待合室に戻った。長い時間を待つことになった。再び孤独で不安な時間が続いた。長椅子に座つた私は、何くわぬ顔でバックから佐野洋子著の『死ぬ

「気まんまん」を取り出して読み始めた。

隣に座った同じ年恰好の女性が横目でチラチラと覗き込んできた。どこを病む方なのだろうかと思ひになった。待合室の人々は、何気ない素振りをしてそれぞれの人々を洞察していた。表情はみんな不安な顔付きで暗くて硬かった。修行僧のような表情に、平静という袈裟を装っていた。

呼びに来た看護師が腰を落として、私の名前の確認をした。膝の上に置いた『死ぬ気まんまん』の表紙を見て、まあ、とたいそうに仰け反った。苦虫を噛むように笑ったら、目が潤んでしまった。

診察室に呼ばれた。先生はMRIの結果をディスプレイの画面にスクロールさせて説明した。

「これが十七年前の梗塞の痕です。右です。それから左半身に麻痺が起りましたね。その後小さいのが出ていますね」

小指の爪くらの大きさの梗塞が白くなって確認できた。ザーッと苦しめられている犯人はこれだったのだ。

「現代の進歩した医療で何とか、もう少し良くなりませんか。卓球をやっています。愛ちゃんのように、よく動く足に

なりたいのです」

先生は笑いながら、困ったような顔をして、カルテをペラペラと見直した。どうも私の年齢を確認しようだった。先生は口角を引いて左側の唇を軽く噛んだ。「まあ、再発しないように頑張らしましょう」宥めるように私の膝をトントンと軽く叩いて微笑んだ。その時にたくさんのオキシトシンが分泌された。先生の言葉は魔法の医術だと思った。私も塗る薬はないと思っていたのだ。

「仕方ない、がんばろう」
という薬をもらって、爽やかな気持ちで病室を後にした。

友達や家族の者は運動能力が落ちた私を、登山にウォーキングにと積極的に誘い出してくれた。横岳、宝剣岳、伊吹山、御在所岳、色々な山々を登ってきた。

ある日、富士見台高原一七三九メートルに登山した時の下山中、浮石に乗って左足を複雑骨折してしまった。六人の友達に毛布で、麓まで下してもらった。とんだ思い出になってしまったが、楽しい思い出である。

娘夫妻が十月十日は骨折の命日だと言っ

て、毎年、その日に登山に誘ってこれる。

ある日、友達が

「卓球だったらやれるかもしれないね」

と言って、卓球クラブに誘ってくれた。個人的にもよく指導してくれた。それから七年が経った。毎日をリハビリだと称して卓球三昧の日々を送っている。いろいろな友達がサポートしてくれる。感謝の日々である。

所属するクラブのコーチが身体のどこが痛いのか、どこが不自由なのか、と尋ねてくれる。コーチは卓球台の対面の下から、立っている私を覗いて

「いかにも立派な足が二本もあるじゃないの……」

と優しく笑う。動かなくても打てる方法を熱心に考えてくださる。

パラリンピックを提唱した、イギリスの医師のルートヴィヒ・グッドマンは「体の失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ！」と述べている。

最近、亡くなられた、女性でエベレスト初登頂の登山家の田部井淳子様は乳癌

を宣告された時、

「この病気はね、三人に一人のくじが当たったのよ。宝くじのような、当たつてうれしくじじゃなくて、残念ネ」

という気持ちでしたと言われた。

それでも手術の十日後、抜糸も済まない内にバルト三国へのツアーで山に登られたそうだ。

「病気になっても病人にはなりたくない」と言つて、登山をはじめ、いろいろなボランテニア活動を継続されていた。

秋の陽射しに両手を広げてみた。十本の影が長く伸びて映つた。寿命はわからないが、健康余命の年数も、両手の十本の指で数えられるようになってきたように思う。

いっぽん、いっぽんと指折り数えたら、影もいっぽん、いっぽんと指を折つた。

足りないかなあと思つて、頭の中で付け足して数えてみた。

いろいろな不利益なくじを引いてしまふかもしれないが、残された日々の中で今日という日の今が、いちばん新しい。

“今ですよ”

丁寧に生きていこうと思つている。
了